

人権コラム 心、豊かに

◆ 「常識」を疑う心

「常識とは 18 歳までに身につけた偏見のコレクションである」これは特殊相対性理論などで知られる物理学者のアルベルト・アインシュタインが残した言葉です。学問の世界では、昨日まで常識だと思われていたことが新たな発見によって覆ることがよくあります。これは、生活の中でも同様のことが考えられるのではないのでしょうか。基本的な“常識”は社会生活を送るうえで不可欠な要素ですが、自分が常識だと思っていることが偏見に基づいた思い込みということもあります。

2017 年（平成 29 年）に内閣府が実施した「人権擁護に関する世論調査」の部落差別に関する設問の中で『部落差別が存在する理由』について「昔からある偏見や差別意識をそのまま受け入れてしまう人が多いから」という回答が 55.8%と最も多くなっています。このように、最初に出会う部落差別に関する情報が間違っただけのものだったとしても、それを受け入れてしまい、差別意識が広がってしまう場合があるのです。

また、『部落差別等の同和問題を知ったきっかけ』については「学校の授業で教わった」の 22.9%に次いで「家族（祖父母、父母、兄弟等）」が 19.6%、「テレビ・ラジオ・新聞・本等」の 16.5%となっています。学校の授業以外の全ての情報が間違っているわけではありません。しかし、部落差別の解消を目的に行われる授業に対して、家族や親戚には部落差別に対し誤った認識を持った人がいたり、その他の情報媒体にも根拠のない偏見に基づいた情報が存在したりすることによって差別意識を受け入れてしまう実態があります。逆に『部落差別等の同和問題を解消するための方策について』の設問では「人権尊重の意識を一人ひとりがもっと自覚すべき」が最も多く、50.6%となっています。

部落差別をはじめとするあらゆる差別の解消のためにも、今自分が“常識”だと思っていることが本当に正しい知識なのか、もう一度考えてみる必要があるのかもしれない。